

アジアの学生相談

筑波大学心理学系 松原 達哉

Student counseling in Asia

Tatsuya Matsubara (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305, Japan*)

Recently, student counseling activities in Asia have become more and more widespread. For the last five years, I have visited student counseling centers in China, Taiwan, South Korea, Hongkong, and Thailand. Here I would like to report on student counseling activities in these Asian countries. I would be very happy if this report could provide some helpful information for student counseling in our country.

Student counseling in China centers on counseling for university students who form a small part of the total 1.2 billion Chinese population. Because of China's reformation, open policies, economic development, internationalization and change of values, many students' states of mind are disturbed, and this is the main reason for the high profile of counseling activities in China. The first student counseling office was set up in the university of Shanghai in 1985, and the China Student Psychological Counseling Society was established in 1990. Now focused on the universities in big cities, counseling activities are being carried out in more than one hundred universities. Communications between China and Japan are also very frequent.

In Taiwan, focused on Taiwan University and Taiwan Teachers' University, counseling activities are carried out enthusiastically, and counselors are professionally trained. In Seoul University, South Korea, counseling activities are also energetically carried out, and facilities, equipments, organizations and staff are fully prepared. In Thailand, although counseling activities are focused on Srinakharinwirot University only further development is expected. In Hongkong, counseling studying abroad plays an active part in counseling activities, especially as Hongkong will become part of China four years from now.

In Japan it is over 40 years since student counseling activities were begun, and we can predict from experience that counseling activities in Japan will be further developed in the future.

Key words: student, counseling, counselor, counseling center.

§1 はじめに

最近、アジアの各国においても学生相談活動が活発になってきた。筆者自身機会があって、ここ5年間に、中国、台湾、韓国、香港、タイなどの学生相談所を訪問し交流を深めてきた。そこで、アジア諸国の学生相談の現状について報告する。

なお、アジア諸国といったが、各国の代表的な大学の中で筆者自身が訪問した大学の学生相談所(センター)を中心に報告する。

§2 中国の学生相談

中国の大学の中でも北京大学、清華大学、北京師範大学、北京医科大学、山東師範大学、北京軽工業学院等の学生相談所(センター)を訪問したが、最初に全体の概要を述べ、次に、その主な大学の現状を報告する。

(1) 中国の学生相談活動の歴史

中国は、人口が世界人口の5分の1の12億人という大国であり、多民族多言語の国である。大学は

611校、学生数は133万5千人、大学院生は11万5千人である(1988年の統計による)。中国の人口から考えれば、少数のエリートのみが進学しているわけである。教育制度は、6・3・3・4制であって、大学生の年齢は、17~8歳から21~2歳までの間である。

中国社会では、80年代に入ってから大きな変化が起きた。改革開放、経済の発展、競争の導入、国際化などにより、人間の生き方も、価値観も大きく変化した。こうした急激な社会環境の変化によって、学生たちは困惑、葛藤、矛盾を感じて、不適応行動を起こすものが増えてきた。けんか、自殺、賭博、飲酒などであり、学生の精神的動揺は大きくなった。

そして、不安、恐怖、強迫症、神経症、うつ病、心理的危機などの症状をもつ者も多くなった。精神問題が原因で、休退学する学生も多くなった(李ら、1988、北京市16大学の学生調査で、精神問題が原因の休学者が37.9%、退学者が64.4%)。

北京郵電学院付設病院の分析では、5年間の大学生の中に、精神病と神経症と心理的障害の発症率は、1980年の0.13%から1986年の4.03%に増加している(李、1990)。自殺学生も年々増えているが、その原因は恋愛、学業、家族問題などである。

こうした学生の精神的問題に対する援助活動として、学生相談が必要になってきた。学生相談室が最初に開設されたのは、1985年に上海交通大学と上海華東師範大学である。交通大学に「益友相談センター」が設置され、心理学者、教育学者、精神科医などが非常勤講師として週2~3回学生相談を開始した。個人面接相談の他に、「性科学知識講座」、「人生相談」、「心理衛生」などの講座も開催し、学生たちからは喜ばれた。

1986年に北京の清華大学、北京医科大学などでも学生相談を開始した。また、浙江大學、山東工業大学なども始めた。この年には、全国で約30大学が学生相談活動を始めた。

1988年6月上海で、「第1回カウンセリングの理論と実践についての研究会」が開催された。そこで、学生心理相談学会の設立準備についての議論をし、「大学心理相談通信」を発刊しはじめた。

1990年11月27日~30日には、北京で「中国学生心理相談学会」が創立され、外国の専門家として松原達哉が記念講演をした。

◇ 中国学生相談年表

- 1985 上海交通大学、上海華東師範大学に心理相談機構「益友相談センター」創設
- 1986 清華大学、北京医科大学、浙江大學、山東工業大学に学生相談所設置
- 1988 上海にて、「第1回カウンセリングの理論

と実践についての研究会」、学生心理相談学会設立準備、「大学心理相談通信」発刊

1989 国家教育委員会調査 12.6万人中20.23%が心理障害

1990 「中国学生心理相談学会第1回学術交流大会」

於 北京師範大学、11月27日~30日 松原達哉が記念講演

1991 「中国学生心理相談学会第1回研修会」

於 国立教育会館 6月 松原達哉が講師

1992 「中国学生心理相談学会第2回学術交流大会」

於 清華大学、7月14日~18日 松原達哉が記念講演

「中国学生心理相談学会第2回研修会」

於 清華大学、7月6日~11日

日本の「第30回全国学生相談研修会」で李從培会長記念講演「中国少年非行の原因と対策」「中国における学生相談の現状と発展」

於 東京、国立教育会館、11月23~25日

1993 「中国学生心理相談学会第3回学術交流大会」於 大連理工大学、8月3日~9日 松原達哉、嘉部和夫、楡木満生らが特別講演

(2) 中国学生相談活動の特徴

中国の学生相談活動の特徴を以下に述べる。

- 1) 1985年に学生相談所が開設され、以来8年目で、年々充実発展している。
- 2) 北京・上海・天津など大都市を中心に行われ、現在100以上の大学に学生相談所がある。
- 3) 方法は、個人面接が中心で、その他集団カウンセリング、通信相談、電話相談も行っている。
- 4) 理論は、来談者中心療法、行動療法、精神分析、認知行動療法などの海外からの輸入理論が中心であるが中国文化と中国人の心理構造と価値観に合致した理論や方法を探究中であり、そのひとつに体得療法がある。
- 5) 名称は、「学生心理相談センター」「心理相談サービスセンター」「学生相談室」などで、学生部に所属している。
- 6) カウンセラーは、心理学・教育学・精神医学者と学生部職員などである。専任カウンセラーは少なく、兼任が多い。養成制度と資格認定基準が不備で、目下準備段階である。
- 7) 相談内容は、性格、人間関係、異性、学業、就職、課外活動、人生、思想、健康などが多い。
- 8) 心理テストは、UPI、EPQ(CMI)、MMPI、16PF、CMI、向性検査、気質60問検査、不安検査などで

ある。

(3) 北京大学学生相談センター

北京大学は文科系大学の重点大学である。学生数は、16,000人(大学生9,000人, 院生DC3,000人, MC4,000人, 内留学生500人)である。その他に, 研究生, 夜間大学生, 通信教育生などが, 8,000人いる。

心理学系は, 1966~78年まで文化大革命で廃止され, 1978年に心理学部として再発足した。文化大革命のときは, 心理学は, にせ科学といわれ, 心理学者は農村に追放されて労働をしていたので, 発展が遅れた。しかし, 現在, 心理学の中では, 臨床心理学と社会心理学を希望する学生が最も多い。

大学の中央にある大学病院前の松林の中に, 木造平屋建の建物があり, その一角にある3部屋50m²が, 1990年12月に開設された学生相談センターである。カウンセラーは8人で, 兼任は, 陳仲庚教授(臨床心理学系主任)が顧問で, 臨床心理学専攻の修士課程の学生3名, 博士課程の学生2名である。王登峰講師(副主任)が所長で, 銭銘胎(女)助手との2人が専任カウンセラーである。院生は1年間の実習生で, 2年目から教官の指導を受けながら相談をしている。週5日間午後2~5時まで相談し, 夏休みも行っている。対象は, 北京大学生が中心であるが, 若い先生の相談や学内の小中高校生の相談もしている。(中国では, 教職員・学生が全員, 大学構内の宿舎に居住し, 教職員や院生の子供の幼小中高校も構内にある。大学が一つの都市になっている。)相談料は, 1時間3元(日本円で70円くらい)である。

相談内容は, 新生は新しい環境への適応, 一般学生は, ①学習, ②対人関係, ③性格・情緒(理想と現実との葛藤, ノイローゼ【30%~40%】), ④人生問題, ⑤恋愛, ⑥健康, ⑦休学・退学などの相談である。その他留学生問題もある。精神障害者など重症の人は, 他の病院へ行く人が多い。自殺者は年に1~2名。年間の相談数は600人(8%)で, 延件数は2000人(15%)である。ノイローゼは約100人で最も多い。3~4年生になると将来の就職問題の進路相談が多い。

カウンセリングの方法は, 来談者中心カウンセリング, 精神分析, 行動療法, 体得療法, 認知療法, 論理療法, 森田療法などを用いている。折衷的が多い。個人面接のほか, 集団カウンセリングも行っており, 現在, 不眠症のためのグループと対人障害のためのグループの2グループ行っている。心理テストは, 16PF, MMPI, EPQ(CMI), 気質60問検査などである。

王所長の案内で, 相談センターを見学したが, す

ぐ前に6階建の大学病院があり, その前にある松林の中に小じんまりと建てられた建物の左から3部屋が相談室になっている。相談室内は, グループカウンセリングを行うために, 椅子が十数個円型に並べられてあり, 他の部屋には相談セットの中に, ベッドも置いてあり, バイオフィードバックや血圧計なども置いてあった。王所長は, 臨床心理学と医学心理学を研究している新進気鋭の若い臨床心理士である。なお, 心理学系の臨床心理学の教官や病院との連携はうまくいっている。

(4) 清華大学学生心理相談センター

清華大学は, 中国一の理工社会学系の総合大学で, ノーベル賞受賞者も一番多い。学生数は大学生11,000人, 院生(MC, DC)3,000人の計14,000人である。旧名園である清華園が大学の敷地になった広大な土地の中にある大学である。

理学部・工学部が中心で最近では社会科学部・教育科学研究所も設置され, 文理総合大学に変革しつつある。学内に幼小中高大大学院があり, その中心が大学と大学院である。大学は5年制である。学長は, 前文部大臣である。学生も教職員も, ほとんどが大学構内に居住している。教職員住宅は15階建の高層ビルとして新築されている。学生寮は, 6階建のビルで, 林立した住宅団地といった感じがする。学生は, 最も知的水準の高いエリート集団で, 自信と誇りに満ちている。しかし, 競争も厳しく, ストレスも高いので, それなりに悩みも多い。

学生心理相談センターは, 林立する学生寮の第1号棟の1階にある。入口に大きく「学生心理相談センター」と「職業相談室」の看板が掲げられている。相談室は個人面接室が2部屋と集団カウンセリング室1部屋の3部屋があり, 左隣が職業相談室, 右隣が保健室(2部屋)になっている(Fig. 1参照)。

1968年9月に開設され, 所長は, 筑波大学に1年3ヶ月, 外国人研究員として来日されていた樊富民助教授(青年臨床心理学専攻, 中国学生心理相談学会副会長)である。優しく学生相談に情熱を傾けているカウンセラーである。学長所属であり, 相談員は専任が1人(心理学), 兼任が4人(高等教育研究所教授, 精神科医, 社会学助教授, 学生部副部長)である。その他に, 非常勤の精神科医が北京医大より隔週に1回, 3時間勤務している。毎週5日間, 午後2時半から5時半まで開室している。所長は, 月・土の2日間勤務しているが, 1日6~8人の相談を行っている。土曜の午後は一番来談者が多く, 午後7時頃まで熱心に相談をしている。

相談対象は, 学生が中心であり, 個別面接は月

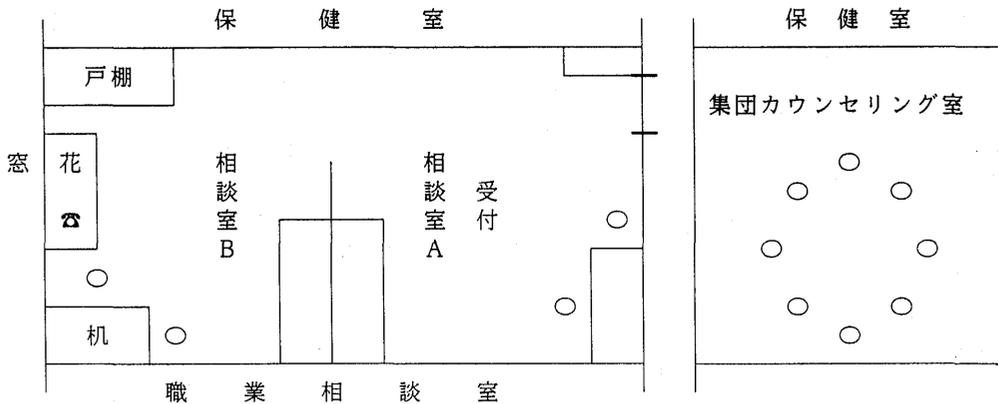


Fig. 1 清華大学学生心理相談センター図

100人延189人位行っている。年間はこの10倍である。新生が多い。主に、来談者中心カウンセリングを中心とした折衷的カウンセリングで面接している。行動療法、精神分析も行っているが、僅かである。心理テストは、16PF、UPI、SDS、EPQ(CMI)、気質60問検査などを用いている。相談方法は、個別、集団、電話などであり、日本版UPIを用いての早期発見、相談も行っている。樊所長は、相談以外に心理学講座、心理学選択科目(青年心理学、社会心理学)など精神健康を含めて講義している。

相談内容は、学習、人間関係、性格・情緒、進路、恋愛、性、健康、留学、思想、その他になっている。なお学生たちは、相談内容が他にもれることを心配するので秘密保持には十分配慮しており、面接中も記録をとらないで、相談面接を集中して行い、学生が帰った後、簡単に記録している。

PRの方法は、新生オリエンテーション、大学新聞、キャンパス全体の宿舎の掲示板、学内放送(昼・夕方)などを用いている。相談は予約制になっている。

樊所長は、日本と密接に交流しており、中国の学生相談のリーダーの1人であり、意欲的である。

(5) その他の大学の心理相談センター

1) 北京師範大学

北京師範大学は、中国最高の心理学、教育学、教科教育学の中心になっている大学である。北京大学は実験心理学、社会心理学が中心であるのに対して、北京師範大学は、教育心理学、臨床心理学、発達心理学などが中心である。臨床心理学の鄭日昌教授(中国学生心理相談学会副会長・北京学生心理相談学会会長)は、アメリカで臨床心理学を学び、中国学生

心理相談研修会では、来談者中心カウンセリング、精神分析、行動療法、心理テストなどについて講師になっている理論家であり、実践家でもある。著書も多い。北京師範大学学生相談センター所長で実践活動も行っている。個別面接、集団カウンセリング、電話相談などを行っている。全体として、他大学と類似した方法、内容、設備である。

2) 北京医科大学

北京医科大学は、中国最高の医学教育の中心的大学である。学生相談室は精神衛生研究所内に設置されている。精神衛生研究所は、東洋では唯一のWHOの研究機関にもなっており、精神医学、精神衛生の研究を行っている。

副所長の李從培教授(精神医学、犯罪心理学専攻)は中国学生心理相談学会会長であり、学生相談に熱心である。同研究所の胡佩誠助教授が中国学生心理相談学会事務局長で、李会長を崔玉華助教授(副会長)とともに補佐している。崔助教授は神経症の研究が中心で、森田療法の研究のために大原健士郎教授のもとに浜松医科大学や浅井病院などにも来日している。これらの先生が中心で学生相談室は運営されている。相談室は研究所内に2室の部屋があり、相談活動をしているが、やや精神医学的な相談が中心であるように思った。その点、スタッフにも臨床心理士は僅少である。

中国では、文化大革命の折、心理学者は農村へ追放され、心の問題は、精神科医が中心で取り扱ってきた。そのため、現在でも中国学生心理相談学会のメンバーの3割が精神科医であって、学生相談の支柱になっている。

3) 北京軽工業学院

北京軽工業学院は、軽工業の単科大学ではあるが、学生相談には、副学長、学生部長ともに熱心である。特に林永和学生相談所長(中国心理相談学会編集委員長)は学生相談に情熱をもやしている。学会の常任理事としても実践的に活躍されている。特に、進路相談についての著書も多い。工業系の大学であるので相談内容も進路についてが多い。相談室は、他大学を小型にした規模で、内容などは類似している。

4) 山東師範大学

山東師範大学は、北京から車で7時間離れた山東省の中心大学である。学生数(4年制)は、6,700人、その他に通信教育・夜間大学生などを含めると、1万人になる。教職員は、2,400人、学部は40学部、心理学教室はスタッフが8人である。

学生相談室は、1988年に発足し、3人の教官(2人が心理、1人が医師)が担当している。大学病院内でも相談をしている。対象は学生のみである。今までに600人の相談をしている。方法は、精神分析、行動療法、人間性中心、論理療法、認知療法などである。心理測定は、アメリカの性格テスト、MMPI、SCTなどが中心である。

内容は精神分裂病、うつ病、ノイローゼ、情緒不安、対人恐怖、視線恐怖、友人、家族、肩こり、同性愛など多様である。一番多いのは、恋愛問題を中心とした対人関係である。軽い場合は1回、重い場合は数回行うが、解決できない精神病などは、責任者と話し合っ、病院へ廻すことが多い。自殺者は、1991年度は0であったがたまにある。自殺念慮者は毎年何人かいる。Student apathy は多い傾向にあるが、伝統的な心理相談では無理であり、新しい方法を開発しないと無理であると医師は述べている。

心理学の教授は、ほとんどが北京師範大学の卒業生であり、学生相談は臨床心理学の権朝魯教授が中心で行っている。相談室はまだ十分整備されていなくて、これからという感じであった。

(6) 中国学生相談の研究の動向

① 中国学生心理相談学会第1回学術交流大会

1990年11月27～30日、北京師範大学で中国学生心理相談学会第1回学術交流大会が開催され、そこの学生相談に関する研究発表の一部をここに紹介し、最近の研究動向を報告する。

- 1) 502名の大学生の性生理心理問題の研究
鄭莉君(内モンゴル師範大学)
- 2) 思春期における性教育の必要性
魏定敏(天津東麗区教育科学研究室)

3) マスターベーションは無害か——カウンセリングセンターからのフィードバック——

- 李先鋒(山東師範学院)
- 4) カウンセリング面接のプロセス
鄭日昌(北京師範大学)
 - 5) カウンセリングと思想教育
鄭日昌(北京師範大学)
 - 6) 情緒不安定の治療
周殿宸(遼寧財政専門学校)
 - 7) パーソナリティテストの専門的選択
孫莉(大連管理幹部学院)
 - 8) 師範専門学校における学生の生理・心理問題の分析
朱小石(武漢市第二師範学校)

② 中国学生心理相談学会第2回学術交流大会

1992年7月14日～18日まで清華大学で第2回大会が開催された。その日程を紹介する。

(大会委員長：樊富民)

- 7月14日(火)
- ◇ 開会式
 - ◇ 記念講演：日、米、中、三国の学生相談の比較
(松原達哉)
 - ◇ 講演会：学生の心理問題とカウンセリング
(松原達哉)
- 7月15日(水)
- ◇ 全体研究報告：樊富民ら6人
 - ◇ “ ”：馬建青ら6人
- 7月16日(木)
- ◇ 分科会交流
- 7月17日(金)
- ◇ テーマ別講演会：神経症と精神病との識別
(崔玉華)
 - ◇ “ ”：カウンセリング理論の新しい発展
(王登峰)
- 7月18日(土)
- ◇ 事例研究
 - ◇ 総会

(7) 中国学生心理相談研修会の動向

① 山東省主任心理相談研修会

1992年4月28日～5月2日まで4日間、山東省で行われた学生心理相談研修会の概要を紹介し、中国の研修会の動向を報告する。

- 4月28日
- 1) 心理相談概論：鄭日昌(北京師範大学教授)
 - 2) 日本の学生相談室の運営：松原達哉

4月29日

- 3) 問題をもつ学生の早期発見と早期相談—UPIを利用して: 松原達哉
- 4) 心理相談面接の技法: 鄭日昌

4月30日

- 5) 開発的集団カウンセリングの理論と実際: 松原達哉
- 6) 心理カウンセラーの資格と養成: 松原達哉

5月2日

- 7) 青少年の心理的特徴と教育: 徐勝三(山東省師範大学教授)

② 北京心理相談学会研修会

1992年5月3日～5月11日まで9日間、北京師範大学で行われた北京心理相談学会研修会の概要を紹介する。

5月3日(学会)

- 1) 日本の学生相談の歴史と現状: 松原達哉
- 2) 日本の学生相談室の運営(電話相談の内容と問題点): 松原達哉

5月4日

- 3) 個別面接相談の方法: 松原達哉
- 4) 心理カウンセラーの養成: 松原達哉

5月5日

- 5) 大学生の自殺の心理と予防: 松原達哉
- 6) 集団カウンセリングの実際: 松原達哉

5月6日

- 7) 学習法の診断と学習指導: 松原達哉
- 8) 心理相談総論: 鄭日昌
- 9) 知的能力測定: 緑 像

5月7日

- 10) 大会報告・大会交流

5月8日(研修会)

- 11) 心理面接相談の過程: 鄭日昌
- 12) 心理障害の分類と診断: 張言連
- 13) 精神健康と心理相談: 緑 像

5月9日

- 14) 精神分析: 鄭日昌
- 15) 来談者中心カウンセリング: 鄭日昌
- 16) グループ別交流

5月10日

- 17) 行動療法・認知療法: 鄭日昌
- 18) 音楽療法・催眠療法: 緑 像

5月11日

- 19) 情緒の安定法: 鄭日昌
- 20) 心理相談と思想政治工作の心理治療効果: 鄭日昌

③ 中国学生心理相談学会第2回研修会

1992年7月6日～11日まで、北京の清華大学で開催された研修会の日程表を紹介する。

7月6日(月)

- ◇中国の学生相談: 李從培(北京医科大学)
- ◇大学生の心理問題の特徴: 張伯源(健康研究所)

7月7日(火)

- ◇カウンセリングの理論1: 王登峰(北京大学)
- ◇カウンセリングの理論2: 〃

7月8日(水)

- ◇面接の方法と過程: 樊富民(清華大学)
- ◇集団カウンセリング: 〃

7月9日(木)

- ◇心理治療1: 張小喬(人民大学)
- ◇心理治療2: 〃

7月10日(金)

- ◇心理相談・心理テスト: 師範大学
- ◇すぐれたカウンセラーになるため: 松原達哉

7月11日(土)

- ◇生活分析的カウンセリング: 松原達哉
- ◇問題のある学生の早期発見(UPI): 松原達哉

④ 中国学生心理相談学会第3回学術交流大会

1993年8月3日～9日まで大連理工大学で第3回学術交流大会が開催され、日本からは松原達哉、嘉部和夫、楡木満生の3氏が特別講演をし、その他に7名参加した。3人の講演題目及び当日の研究発表テーマの一部を以下にのべる。

特別講演

- 1) 学生相談員の1年間の活動—筑波大学学生相談員の場合— 筑波大学 松原達哉
- 2) 生活分析的カウンセリングの理論と実践 筑波大学 松原達哉
- 3) 家族療法 自治医科大学 楡木満生
- 4) 学生相談の具体的方法—学生相談論— 日本大学 嘉部和夫

講演

- 1) 米国の最新の心理療法 北京医科大学 胡佩誠
- 2) 森田療法 北京医科大学 崔玉華

研究発表

理論と方法が41件、調査研究が17件、事例研究9件、その他9件計76件の発表があった。ここでは、その一部を紹介する。

A. 理論と方法

- 1) カウンセリングの中国式の建構 楊懷中
- 2) 大学カウンセリング活動の新方式・ピアカウンセリング 樊富民

- 3) 大学生人格検査とUPI 全国UPI研究会
 4) 大学生心理障害の原因分析 李林英
 5) 大学生就職心理の変化の方向 林永和
 6) UPIとSCL-90との比較研究 王建中
 7) 大学生人間関係の扇面カウンセリング模式 趙穎
 8) 大学生の失恋心理分析と解決脱出法 王起香・王敏
 9) 推薦入学生の心理測定と分析 李淑紅
 10) 理工系学生の人格特徴と心理健康実態 胡衛東他
- B 調査研究
 1) 米国留学生中の中国学生の心理分析 胡佩誠, 孫国度
 2) 承德医学院医学系学生の心理特徴 丁勤章
 3) 大連市大学生の心身健康調査 黄秀珍他
- C 事例研究
 1) 性的発達に悩まされた大学生 李宏珊
 2) 恐怖症の心理治療 李宏珊
 3) 男性の性倒錯の一事例 買睦明
- D その他
 1) カウンセリングと思想工作 金平・主学先

⑤ 中国学生心理相談学会の概要

1990年11月に設立され、会員数は約500人、**会長** 李從培(北京医科大学)、**副会長** 崔玉華(北京医科大学) 鄭日昌(北京師範大学) 樊富民(清華大学) 馬建青(浙江大学) 王小軫(中央高級教育行政学院)、**事務局長** 胡佩誠(北京医科大学)、**会計** 唐登華(北京医科大学)、**編集長** 林永和(北京輕工業学院)、支部は、北京、浙江省、陝西省、湖北省、四川省、遼寧省、上海市など7支部ある。行事としては学術交流大会を第1回、北京師範大学(90.11)、第2回、清華大学(92.7)、第3回、大連理工大学(93.8)の3回行っている。研修会も本部及び各支部で自発的に行っている。会報は「大学生心理相談」を年2~3回発行している。今後の方針は、学生相談の普及及び向上、国際交流の促進である。日中友好としては、情報交換、学術論文発表、人の交流、会報の交換、共同研究、共同の著書出版なども考えている。

§3 台湾の学生相談

台湾大学は台湾で一番古くて著名な総合大学である。学生数は約2万人で、首都台北市内にある。カウンセリングセンターは、大学の中央の保健管理センターと併立してあったが、1990年から心理学系の隣に新設された新校舎内に移転した。アメリカの影

響をうけて活動も活発に行われている。カウンセリングセンターは、学生及び他の人の相談も行っている。

スタッフは、所長が臨床心理士の教授であり、他のカウンセラーは、心理学系の所属で、学部・大学院の講義と平行して行っている。また、相談内容によっては、事務職員もインターク以外に相談も行っている。臨床心理学専攻の院生も学部生や外来の人のカウンセリングは行っている。なお、センターがカウンセラー養成の実習の場になっており、かなり多数の院生が相談活動を行っている。

施設・設備は立派であり、個人面接室、集団面接室、遊戯室、観察室、待合室、会議室など多くの部屋がある(筆者が訪問した時は、移転途中であった)。

台湾師範大学は、教育系の総合大学であり、教育心理学、臨床心理学、発達心理学などは、台湾大学よりスタッフも施設・設備も充実している。博士課程まである。

カウンセリングセンターは、文科系の建物の1階にあり、面接室、待合室、観察室などあり、来談者も多い。専任の臨床心理士のカウンセラー3名と兼任のカウンセラー2名がいる。入口の掲示板にカウンセラーの氏名と当番日とが書いてある。学生は、カウンセラーを選んで相談を受ける。アメリカの影響をうけて、相談活動も盛んである。カウンセラー養成も熱心に行っている。各種のカウンセリングの理論や技術を体得したカウンセラーが熱心に相談を行っている。学生も入りやすく、気楽に相談している。

§4 韓国の学生相談

首都にあるソウル大学は、大学の規模・学生数・スタッフともに韓国で最も充実している総合大学である。

カウンセリングセンターは、筆者が訪問したアメリカのUCLA、USC、ハワイ大学、英国のロンドン大学、フランスのパリ大学、カナダのUBC、アジアの諸大学などと比較して最も充実していると思った。

個人面接室が約20室もあり、カウンセラーも専任・兼任・インターン・院生を含めて大世帯である。個人面接が、かなり中心に行われている。

Lee Chang Ho所長は臨床心理士で、韓国カウンセリング学会会長であり、韓国の心理学会でも重鎮で、国際会議にもよく参加している。心理学研究室との協力も良好で、院生のカウンセラー養成にも熱心である。

カウンセリングの理論や技法は、アメリカの影響を受けており、心理テストも盛んに行われている。梨花女子大学は、医学部・薬学部などもある韓国一の女子の総合大学である。設備・施設ともに充実し、敷地もかなり広い。日本の女子大学のイメージとは違って、文理教医薬工家政など含めた大規模大学である。

学生相談所は、独立した立派な建物にあり、個人面接室が数室と待合室があり、入口には相談室の案内、行事の案内などがきれいに掲示してある。面接室も女子大らしく小ざれに飾ってあって、落ち着いて相談できる。女性の所長で、臨床心理学の講義もしている。

カウンセリングの諸理論を折衷して、学生の様々な相談に応じている。学生は韓国一のエリート女子学生ではあるが、学業・進路・適応上の相談に来談している。

前所長の黄應淵教授は日本にも何回も来日し、かつては、日本学生相談研究会の会員でもあった。

§5 タイの学生相談

1991年7月9日～20日まで、タイの5つの大学と文部省、国立教育研究所などへ、「帰国留学生のタイにおける活動の実態及び日本留学中の適応不適応問題」についての調査研究に行った。

その折に、タイの大学で最もカウンセリングの盛んなシーナカリンウィロット(Srinakharinwirot)大学と地方大学のプラナコン(Pranakorn)教育大学の学生相談所を訪問した。

シーナカリンウィロット大学のカウンセリングセンターは、所長がアメリカでPh.Dをとった臨床心理士であり、設備・施設もアメリカに類似している。

部屋数は、8部屋あって、集団カウンセリングのできる大部屋が1つ。そこで、個人面接もでき、ベッドもあって、自律訓練や催眠面接も行っている。さらに集団カウンセリング兼会議室のできる大部屋がもう1つあり、そして、寝ころんでエンカウンターグループのできるじゅうたんの敷いた大部屋が1つある。また、個人面接室が4つあり、その1部屋は、面接の椅子2つの前にマイクがあり、面接場面を隣室の学生観察室(一方が鏡)から十数人で観察できるようになっている。(Fig. 2参照)

相談内容は、情緒、性格、進学、就職、修学、経済、対人関係、性、生き方、家庭問題など、日本と類似した傾向である。なお、カウンセラー養成にも熱心で、学生、院生の臨床実習の場にもなっている。指導には、VTRも豊富に活用されている。なお、この大学には、人間科学研究所、心理テストセンターなども別があり、心理学のメッカという感を受けた。

プラナコン教育大学の学生相談室も見学したが、面接室が3つ(1つは受付)、待合室が1つで、比較的小規模の相談室であった。

なお、タマサート(Thammasart)大学、カセサート(Kassasart)大学、コンケン(Khon Khaen)大学にも学生相談室がある。そして、コンケン大学では、筆者が「日本の学生相談活動」と「生活分析的カウンセリングの技法」について講演をした。

アジア地域の大学では、アメリカに留学してPh.DをとったCPが多いが、アメリカ流のカウンセ

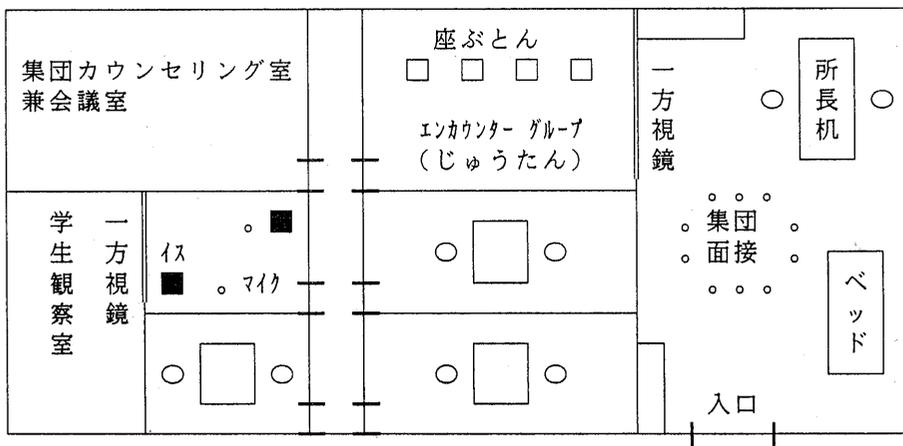


Fig. 2タイのシーナカリンウィロット大学のカウンセリングセンター図

リング理論や方法の紹介ではなく、日本独自に開発された森田療法、内観法、UPI、LAC法などに関心が強く、質問も集中した。

§6 香港の学生相談

中文大学は、中国系の比較的新しい総合大学である。岡の上の見晴らしのよい所に、建物が林立している。カウンセリングセンターは、独立した小じんまりした建物であるが、充実している。

カウンセラーは、3人の女性の教職員が専任で行っている。1人だけが臨床心理士である。学習、性格、進路相談を中心に熱心に行っている。特に、欧米への留学相談と就職相談が活発である。香港が2年後に英国から中国に返還されるので、学生たちの中には、欧米への留学を希望している者が多い。そのため、英米の主要大学や大学院案内が用意され、きめ細かい留学相談が行われている。就職相談も盛んで、各企業・官庁などの募集要項も用意されている。職業適性検査・性格検査などは、コンピューターを利用して行っている。なお、常用語は、中国語と英語で皆2か国語を使って相談をしている。

§7 終りに

中国、台湾、韓国、香港、タイなどの学生相談活動の現状を報告した。中国を除いて、他の国は、アメリカのカウンセリングの影響を日本と同様にうけ

ている。臨床心理士が、欧米で学習した人が多いからである。中国は、日本との交流も多く、諸外国の学生相談の理論や技法を参考にしながら中国人に適した独自のカウンセリングを開発しようとしている。そして、日本やアメリカに追いつけ追い越せという意欲に燃え、短期間ではあるが、その発展はめざましく、やがて世界のリーダーの1つになるのではないかと思った。

参 考 文 献

- 松原達哉 1981 最近の中国の教育事情 筑波フォーラム 15, 96~102.
- 松原達哉 1990 中国学生心理相談学会の動向 筑波大学臨床心理学論集 第6集 73~76.
- 樊 富民 1991 中国における学生相談活動の動向 学生相談研究 Vol.12, No.1 25~29.
- 松原達哉 1991 中国学生心理相談学会の発足と研究の動向 学生相談研究 Vol.12, No.1 30~32.
- 松原達哉 1991 臨床心理学の国際交流と日本のoriginality—米国、中国、タイとの交流より— 筑波大学臨床心理学論集 第7集 1~5.
- 松原達哉 1992 中国・台湾・韓国・香港・タイの学生相談第30回全国学生相談研修会報告書シンポジウム, 世界の学生相談 53

—1993.9.30受稿—